

「N市民 緑下家の物語」①

N市は、1945年の原子爆弾投下によって廃墟となった。その後、日本の経済成長とともに復興を遂げ、廃墟の経験は次第にN市民の記憶の中から消え去っていった。

緑下家が県北部の離島からN市中心部に移住したのが1970年代後期、父、緑下川音（みどりしたかわおと）は工業高校の国語の教師をしながら、母、美濃（みの）とともに三人の子供を育てた。

主人公の孤独な青年、緑下稲光（みどりしたいなみつ）はその三男である。稲光は、ひとり言を言うのが癖である。目に映る光景を言葉で描写しテープレコーダーに記録するという地味な趣味がある。ひとり言以外はほとんど無口で、割に合わないその場しのぎのバイト生活を続けている。

長男の名前は、陽（よう）。陽は右翼団体のリーダーの「ボス」という男からクズのような仕事をもらい生活している。ハマノ町の居酒屋で働くマリーという恋人がいる。

次男の名前は、次男（つぎお）。次男は、生まれて三時間で息を引き取ったが、母がせめて名前だけでもと、埋葬時に「次男」という名前を父によって付けられ、緑下家の墓に刻まれたのである。次男は、稲光の口をかりてN市の世界へと顔を出すことができるようである。稲光がしきりにひとり言を言うのは実は亡霊となった次男との対話でもあるのだ。

陽と稲光には、ユミという一人の姉がいる。ユミは突然失踪し、行方知れずである。噂では勤めていた会社の上司との関係に原因があるとされたが、それも噂だからさだかではない。時々、稲光はN市の街角でユミの幻影を見たりする。

ある日（2011年5月7日）、公園でいつものように声の記録をテープレコーダーに吹き込んでいた稲光のもとに兄の陽が現れる。彼はボスから市長の殺害計画を密かに聞かされたことを稲光に告げるのである。